

【クライミングの25年を振り返る】

～ 国体少年種別を中心に～

【北海道高体連登山専門部 室蘭栄高等学校 山納 秀俊】

2002年開催の高知国体で踏査競技が廃止され、国体では少年種別にもクライミングが導入されることになった。それまで縦走や踏査など、山の中で行われていた山岳競技が、体育館や運動公園に設けられた人工壁で観客の声援を受けながら行われるようになった。2008年の大分国体ではついに縦走競技も廃止され、リードとボルダークライミング2種目となった。ここに至って、急傾斜の山道を規定の荷重を背負って走る過酷な国体山岳競技は完全に過去のものとなり、スポーツクライマーがトップを競う大会となった。

私事で恐縮だが、私が国体やクライミングに関わるようになったのは1999年のことである。当時、道岳連で競技を担当し、北海道選手の強化を一身に背負い指導されていた故奈良憲司先生（美唄工業高）から、「3年後にはクライミングが国体種目になるので、これから3年計画で選手の養成と体制作りを進めていく。」と言われ、指導者の末席に加えていただいたのがきっかけである。当時の私は、クライミングなどは一部の先鋭的な人間が行うもので、自分には関係のない世界だと思っていた。書店で『岩と雪』などを立ち読みしても、まさか高校生が、そして小学生までが取り組むスポーツになるなどとは想像もできないほど危険で冒険的な香りがした。高体連で山岳部顧問を対象としたクライミング研修会（講師は奈良先生、札幌南高の小笠原浩先生、札幌北高の橋村昭男先生）が行われたのもその頃だったと思うが、落下事故への不安が大きく、ロープは切れることはないのか、などと質問したことを覚えている。クライミングにおける数々の墜落事故が生々しく記録、検証された『生と死の分岐点』（ピットシューベルト、山と溪谷社）が出版され話題となったのも1999年だった。

翌2000年には、高さ15mの本格的なクライミングウォールを持つ北海道立総合体育センター「きたえーる」が完成し、国際ルートセッターだった飯山健治氏を迎え、北海道山岳連盟主催の「きたえーるオープニングコンペ」が開かれた。当時は日本フリークライミング協会主催のジャパンツアーが行われていたが、この大会を皮切りに、北海道でもラウンド制で年間ランキングが付く「北海道

ツアー」が始まった。当時まだ小学生だった國谷斗馬選手や杉本怜選手など、後に北海道のクライミングシーンをリードしていく人材もこの年に大会デビューしている。北海道の「競技スポーツとしてのクライミング元年」といえばこの年になるのではないだろうか。「北海道ツアー」は毎年4回、多い年では5回のラウンドが開かれた。

他県に先駆けた取り組みの成果は、国体にクライミングが導入されて2年目、2003年静岡国体からはっきり現れてくる。この年の国体では少年男子（札幌南高 塚田洸・美唄工業高 奥谷和也）が4位に入賞し、成年女子も6位に入賞した。さらに翌年、2004年の埼玉国体では、少年女子（札幌南高 田部千恵子・倶知安高 萩原亜咲）が全国1位という快挙を成し遂げ、少年男子（札幌南高 塚田洸・美唄工業高 國谷斗馬）も3位入賞、総合成績でも天皇杯・皇后杯、それぞれ7位入賞を果たす。天皇杯・皇后杯入賞は1989年の「はまなす国体」以来15年ぶりである。

その後もしばらくクライミングでは複数の種別で入賞し、2006年兵庫国体ではついに全種別（成年男女・少年男女）での入賞を果たした。

縦走が廃止された2008年大分国体では選手全員がクライミングのエキスパートとなり、競技レベルが高くなったが、少年から成年に上がった選手たちの活躍がめざましく、2015年和歌山国体まで8年連続で天皇杯入賞を続けている。特にボルダーでは、成年女子（坂本瑛子・萩原亜咲）が2010年千葉国体及び2011年山口国体で2年連続1位、山口国体では成年男子（國谷斗馬・杉本怜）もボルダーで1位となり、成年男女アベック優勝の形となった。そして、総合成績においても2012年岐阜国体では天皇杯・皇后杯ともに第2位という好成績を収めた。

2010年代に入ると、スポーツクライミングのオリンピック種目への追加が有力視されるようになり、2016年のIOC総会で東京2020五輪の追加種目となってから競技人口の増加と競技レベルの向上が一気に進んだ。本州の都市部では競技施設も急増し、東京では山手線の駅ごとにクライミングジムがあるとまで言われるように

なった。競技会では小学生のうちからジムでクライミングを始めた選手が上位を占めるようになり、高校の部活動で始めた選手はなかなか勝てなくなってきた。

2010年から高体連の共催大会として全国高等学校選抜スポーツクライミング選手権大会が開催されるようになり、高体連種目としての普及が期待されたが、ジムクライマーが大会で上位を占める状況の中で、部活動への浸透は進まず、16回目を迎えた2025年の選抜大会の北海道予選に出場した部活チームは、とうとう遠軽高校だけになってしまった。全国高体連共催大会の予選でありながら、高体連の大会という側面は薄れ、全道選抜登山大会が完全に定着した2025年から、「高体連共催大会」(1大会のみ申請可能)は、選抜登山大会が担うことになった。

近年、全国レベルが上がる中で苦戦を強いられてきた北海道の少年選手だが、2024年の全国高等学校選抜スポーツクライミング選手権大会で、札幌白石高校2年の荒川翔哉選手が5位に入賞した。2025年の国民スポーツ大会(滋賀国スポ)では、荒川選手が札幌市立北野台中学校3年の下山士和選手と組みリード、ボルダーともに6位に入賞し、3年ぶりに北海道チームとして国スポ賞状を持ち帰ることができた。

本州の都市部に比べてクライミング施設が少ないことから選手の絶対数も少ないが、今は札幌以外にも函館、釧路、帯広、旭川などに民間のクライミングジムがあり、また小樽、留萌、羽幌などにはそれぞれ地域山岳会の人たちが地元の子どもの指導しているクライミング施設があり、遠軽高校で長く指導されてきた畑野和宏先生のご自宅併設の壁からも多くの選手が生まれている。道岳連でも小学生からの選手強化を始めたところだ。高校生の競技者は現状では多いといえないが、小・中学生の裾野は確実に広がっており、そのレベルも高い。彼らが順調に育って国民スポーツ大会で活躍するのが楽しみである。

*高校生が主に出場する大会は他にユース日本選手権大会があり、世界ユースで活躍していた選手もいます。また、成年選手とも競い合うジャパンカップに出場している高校生選手もいますし、卒業後はワールドカップで活躍している選手もいます。紙面の都合で、本稿では国体(国スポ)に焦点を当てて記しています。全国高校選抜大会については別稿、畑野和宏先生が書かれたページをご覧ください。



リード決勝ルートに登る荒川・下山組(2025 滋賀国スポ)



ボルダー決勝課題に挑む荒川・下山組(2025 滋賀国スポ)



賞状を手にする北海道チーム(2025.10.5 竜王町総合運動公園)

【 国体(国スポ)スポーツクライミング競技少年選手の足跡(2002年～2025年) 】

*2002年からクライミングが導入され2008年からはリードとボルダー2種目に。2020・2021年はコロナ渦で中止となる。太字は入賞(8位まで)

<u>2002年 57回 高知国体</u>	少年男子	クライミング	10位	(美唄工業高校 高嶋優・美唄工業高校 小野紀秀)
	少年女子	クライミング	15位	(札幌南高校 三上尋恵・富良野緑峰高校 牧野理英)
<u>2003年 58回 静岡国体</u>	少年男子	クライミング	4位	(札幌南高校 塚田洸・美唄工業高校 奥谷和也)
	少年女子	クライミング	10位	(札幌南高校 田部千絵子・札幌南高校 花田沙智子)
<u>2004年 59回 埼玉国体</u>	少年男子	クライミング	3位	(札幌南高校 塚田洸・美唄工業高校 國谷斗馬)
	少年女子	クライミング	1位	(札幌南高校 田部千絵子・倶知安高校 萩原亜咲)
<u>2005年 60回 岡山国体</u>	少年男子	クライミング	7位	(美唄工業高校 國谷斗馬・美唄工業高校 辻道良平)
	少年女子	クライミング	2位	(倶知安高校 萩原亜咲・美唄工業高校 山下ちひろ)
<u>2006年 61回 兵庫国体</u>	少年男子	クライミング	8位	(美唄工業高校 今野竜也・美唄工業高校 鎗水卓也)
	少年女子	クライミング	5位	(札幌稲西高校 鷹内麻莉子・美唄工業高校 山下ちひろ)
<u>2007年 62回 秋田国体</u>	少年男子	クライミング	2位	(美唄工業高校 鎗水卓也・札幌西高校 杉本怜)
	少年女子	クライミング	7位	(美唄工業高校 山下ちひろ・札幌稲西高校 松本郁恵)
<u>2008年 63回 大分国体</u>	少年男子	リード	6位	(札幌西高校 杉本怜・美唄工業高校 岡部一成)
		ボルダー	2位	(札幌西高校 杉本怜・美唄工業高校 岡部一成)
	少年女子	リード	10位	(札幌稲西高校 松本郁恵・立命館慶祥高校 四ツ屋美歩)
		ボルダー	9位	(札幌稲西高校 松本郁恵・立命館慶祥高校 四ツ屋美歩)
<u>2009年 64回 新潟国体</u>	少年男子	リード	4位	(札幌西高校 杉本怜・美唄工業高校 岡部一成)
		ボルダー	3位	(札幌西高校 杉本怜・美唄工業高校 岡部一成)
	少年女子	リード	12位	(立命館慶祥高校 四ツ屋美歩・札幌白陵高校 山本潔枝)
		ボルダー	13位	(立命館慶祥高校 四ツ屋美歩・札幌白陵高校 山本潔枝)
<u>2010年 65回 千葉国体</u>	少年男子	リード	16位	(遠軽高校 菅原亨介・札幌西高校 佐藤嘉晃)
		ボルダー	13位	(遠軽高校 菅原亨介・札幌西高校 佐藤嘉晃)
	少年女子	リード	18位	(遠軽高校 大泉彩・札幌稲西高校 高田未来)
		ボルダー	18位	(遠軽高校 大泉彩・札幌稲西高校 高田未来)
<u>2011年 66回 山口国体</u>	少年男子	リード	13位	(美唄工業高校 早坂翔・札幌西高校 佐藤嘉晃)
		ボルダー	10位	(美唄工業高校 早坂翔・札幌西高校 佐藤嘉晃)
	少年女子	リード	9位	(遠軽高校 橋本菜稀・札幌市立中央中学校 佐々木里穂)
		ボルダー	9位	(遠軽高校 橋本菜稀・札幌市立中央中学校 佐々木里穂)
<u>2012年 67回 岐阜国体</u>	少年男子	リード	15位	(遠軽高校 菅原宏介・遠軽高校 大神田恭輔)
		ボルダー	15位	(遠軽高校 菅原宏介・遠軽高校 大神田恭輔)
	少年女子	リード	3位	(北海学園高校 佐々木里穂・北星学園女子高校 小武芽生)
		ボルダー	6位	(北海学園高校 佐々木里穂・北星学園女子高校 小武芽生)
<u>2013年 68回 東京国体</u>	少年男子	リード	15位	(札幌工業高校 浅利礼一・札幌稲雲高校 小山彬)
		ボルダー	16位	(札幌工業高校 浅利礼一・札幌稲雲高校 小山彬)
	少年女子	リード	5位	(北海学園高校 佐々木里穂・北星学園女子高校 小武芽生)
		ボルダー	4位	(北海学園高校 佐々木里穂・北星学園女子高校 小武芽生)

<u>2014年 69回 長崎国体</u>	少年男子	リード	7位 (遠軽高校 松浦凌・江別高校 武者知希)
		ボルダー	8位 (遠軽高校 松浦凌・江別高校 武者知希)
	少年女子	リード	10位 (北海学園高校 佐々木里穂・遠軽町立遠軽中学校 北谷未紗)
		ボルダー	11位 (北海学園高校 佐々木里穂・遠軽町立遠軽中学校 北谷未紗)
<u>2015年 70回 和歌山国体</u>	少年男子	リード	5位 (美唄尚栄高校 岸本武蔵・江別高校 武者知希)
		ボルダー	4位 (美唄尚栄高校 岸本武蔵・江別高校 武者知希)
	少年女子	リード	18位 (遠軽高校 北谷未紗・札幌市立中島中学校 佐藤いぶき)
		ボルダー	17位 (遠軽高校 北谷未紗・札幌市立中島中学校 佐藤いぶき)
<u>2016年 71回 岩手国体</u>	少年男子	リード	19位 (遠軽高校 関根溪人・遠軽高校 亀田翔太郎)
		ボルダー	19位 (遠軽高校 関根溪人・遠軽高校 亀田翔太郎)
	少年女子	リード	16位 (遠軽高校 北谷未紗・札幌市立新川中学校 上原子瞳)
		ボルダー	12位 (遠軽高校 北谷未紗・札幌市立新川中学校 上原子瞳)
<u>2017年 72回 愛媛国体</u>	少年男子	リード	18位 (札幌市立常盤中学校 坂本大河・立命館慶祥中学校 竹内悠真)
		ボルダー	19位 (札幌市立常盤中学校 坂本大河・立命館慶祥中学校 竹内悠真)
	少年女子	リード	15位 (遠軽高校 北谷未紗・札幌静修高校 上原子瞳)
		ボルダー	15位 (遠軽高校 北谷未紗・札幌静修高校 上原子瞳)
<u>2018年 73回 福井国体</u>	少年男子	リード	17位 (札幌平岸高校 坂本大河・立命館慶祥高校 竹内悠真)
		ボルダー	3位 (札幌平岸高校 坂本大河・立命館慶祥高校 竹内悠真)
	少年女子	リード	18位 (遠軽高校 東さくら・七飯町立大中山中学校 福井こころ)
		ボルダー	17位 (遠軽高校 東さくら・七飯町立大中山中学校 福井こころ)
<u>2019年 74回 茨城国体</u>	少年男子	リード	10位 (札幌平岸高校 坂本大河・立命館慶祥高校 竹内悠真)
		ボルダー	4位 (札幌平岸高校 坂本大河・立命館慶祥高校 竹内悠真)
	少年女子	リード	13位 (小樽桜陽高校 吉田ゆな・札幌大谷高校 上原子音羽)
		ボルダー	16位 (小樽桜陽高校 吉田ゆな・札幌大谷高校 上原子音羽)
<u>2022年 77回 栃木国体</u>	少年男子	リード	19位 (函館西高校 齋藤玲太・札幌市立幌東中学校 工藤賢悟)
		ボルダー	13位 (函館西高校 齋藤玲太・札幌市立幌東中学校 工藤賢悟)
	少年女子	リード	8位 (小樽桜陽高校 吉田ゆな・札幌大谷高校 上原子音羽)
		ボルダー	10位 (小樽桜陽高校 吉田ゆな・札幌大谷高校 上原子音羽)
<u>2023年 特別 鹿児島国体</u>	少年男子	リード	15位 (函館西高校 齋藤玲太・大麻高校 若宮楽空)
		ボルダー	11位 (函館西高校 齋藤玲太・大麻高校 若宮楽空)
	少年女子	リード	18位 (小樽桜陽高校 酒井雪羽・北星学園女子高校 小鍛冶菜花)
		ボルダー	17位 (小樽桜陽高校 酒井雪羽・北星学園女子高校 小鍛冶菜花)
<u>2023年 78回 佐賀国体</u>	少年男子	リード	12位 (札幌龍谷 田中岳・札幌白石 荒川翔哉)
		ボルダー	18位 (札幌龍谷 田中岳・札幌白石 荒川翔哉)
	少年女子	リード	16位 (北海高校 清水陽菜乃・小樽桜陽高校 酒井雪羽)
		ボルダー	17位 (北海高校 清水陽菜乃・小樽桜陽高校 酒井雪羽)
<u>2025年 79回 滋賀国スポ</u>	少年男子	リード	6位 (札幌白石高校 荒川翔哉・札幌市立北野台中学校 下山士和)
		ボルダー	6位 (札幌白石高校 荒川翔哉・札幌市立北野台中学校 下山士和)
	少年女子	リード	17位 (小樽桜陽高校 酒井雪羽・北斗市立浜分中学校 村上和奏)
		ボルダー	22位 (小樽桜陽高校 酒井雪羽・北斗市立浜分中学校 村上和奏)

【全国高等学校選抜クライミング選手権大会のあゆみ】

【元遠軽高校 畑野和宏】

高校生年代のスポーツクライミングの技術向上と発展を目指し、「第1回全国高校生クライミング選手権大会」が開催されたのは2010年のことであった。当時の日山協が主催し全国高体連が共催するという形で、「クライミングの甲子園を目指す」埼玉県加須市が開催地となった。

その数年前から北海道のユース世代には、故奈良憲司先生の指導の下、美唄工業高校や札幌西高校、倶知安高校から全国でもトップレベルのクライマーが育っており、高体連が関わる大会が開催されるということは指導者としても競技者としても大変に喜ばしい出来事であった。

第1回大会には、クライミング北海道選手権の結果をもとに推薦され、札幌西、富良野緑峰、札幌稲西、札幌清田、美唄工業、遠軽から男女合わせて15名が出場した。ユース日本代表や、シニアの日本代表である選手も多数出場するハイレベルな大会となる中、準決勝（男子123名、女子90名中それぞれ26位タイまで）に3名（遠軽菅原・橋本選手、札幌西佐藤選手）が進出した。中でも菅原亨介選手（遠軽3）は9位に食い込み、決勝進出まであと1人という健闘を見せた。さらに遠軽高校は男子学校対抗（複数名が出場した学校の上位2名の成績による）で4位入賞を果たした。（32校中）

第2回大会以降は出場資格が厳格化され、各都道府県予選（北海道の場合はクライミング北海道選手権）を突破した男女2名ずつが出場資格を得ることとなり、同年度内の他の全国大会（国体やユース日本選手権など）入賞者（8位以内）も参加できるようになった。よって、千葉県や埼玉県などのクライミング王国以外は10名を超える参加はほぼ不可能となり、第16回大会まで、北海道からの出場は4～9名で推移している。

第2回大会では佐藤嘉昭選手（札幌西2）が2年連続で準決勝に進出し10位と気を吐いた。この大会以前からそうであったことだが、クライミングは個人が近隣のクライミングジムで練習し大会参加するスタイルをとる者が多く、高校の部活動として取り組んでいる学校は極めて少なかった。（登別、札幌稲西、美唄工業のち美唄尚栄、富良野緑峰、遠軽）

第3回大会では、菅原宏介選手（遠軽3）が12位、佐々木里穂選手（北海学園札幌1）が14位と2名が準決勝に進出し、遠軽高校は男子学校対抗で2度目の

4位入賞を果たした。北海道悲願の決勝進出は第4回大会（2013年）でなされた。小武芽生選手（北星女子1）が1年生ながら予選、準決勝、決勝の全てを完登し優勝したのである。当時すでにシニアの日本代表と



高校日本一の小武選手（写真は第6回大会）

して活躍していた選手であり、その実力を十分に発揮した。なおこの大会では佐々木選手（北海学園札幌2）も準決勝に進み13位と健闘を見せた。

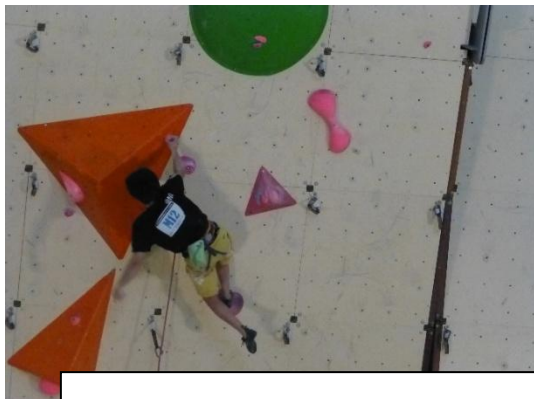
第5回大会は札幌真栄、美唄尚栄、江別、遠軽、北海学園札幌、北見北斗から男女合わせて9名の参加があった。男子は松浦凌選手（遠軽3）が9位、武者知希選手（江別2）が17位、岸本武蔵（美唄尚栄2）が27位と3名が準決勝に進出、女子も佐々木選手（北海学園札幌3）が3年連続で準決勝に進んだ。（21位）遠軽高校は男子学校対抗で3度目の4位入賞となった。



遠軽3度目の団体4位入賞(第5回大会)

第6回大会にも快挙が達成された。2年連続出場の武者知希選手（江別3）が2位入賞を果たしたのだ。さらに小武選手（北星女子3）も4位に入賞し「北海道強し」を他の都府県に印象づけることができた。なお、武者選手はのちに日本代表となり、リードワールドカップにて準決勝進出を果たした。小武選手は2011年

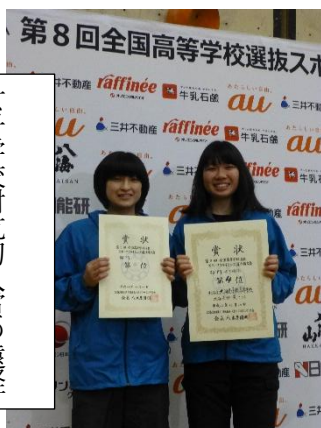
からユース代表、日本代表として世界で活躍し、ワールドカップ優勝(2024年)、世界選手権4位入賞(2018年)など輝かしい活躍を続け今なおプロクライマーとして世界を舞台に戦っている。



第6回大会にて2位入賞の武者選手

なお第6回大会では高木智和選手(札幌工業3)も準決勝に進み23位に食い込んでいる。また、富良野緑峰高校からは男子2名が出場した。

第7回大会は遠軽から男女4名が出場するも準決勝に進む(26位以内)ことはできなかった。第8回大会は、女子が気を吐いた。北谷未紗選手(遠軽3)が19位、上原子瞳選手(札幌静修1)が24位と準決勝に進出し、東さくら選手(遠軽2)の健闘もあり、遠軽は北海道女子として初めての学校対抗4位入賞を果たした。



女子学校対抗初入賞の遠軽

第9回大会は出場校に大きな変化が見られた。札幌平岸、立命館慶祥、遠軽、北海道科学大高、札幌静修から7名の出場となった。坂本大河選手(札幌平岸1)は24位と準決勝に進み、

翌年の世界ユース選手権7位(ボルダリング)につながる活躍であった。なお坂本選手も2024年には日本代表としてワールドカップに出場している。

第10回大会には函館中部、立命館慶祥、遠軽、函館大谷、札幌静修から6名が出場するも予選突破はならなかった。2020年、第11回大会は残念なことになった。新型コロナウイルスの影響で中止となったのである。インターハイや高校野球などの中止と同様に選手たちの活躍の場が失われたことは残念でならない。しかし当時を振り返ると開催の道はなかったであろう。



第9回大会開会式 制服姿が坂本選手

1年間のブランクはあったものの第12回大会が2022年に復活した。小樽桜陽、札幌大谷、遠軽から4名が出場したが準決勝進出はならなかった。第13回大会には札幌龍谷、函館西、小樽桜陽、札幌大谷、北海、遠軽から7名が出場した。この大会では吉田ゆな選手(小樽桜陽2)がただ一人準決勝に進み27位と気を吐いた。また遠軽は個人成績では上位に入ることはできなかったが女子学校対抗で5位入賞を果たした。

第14回大会には、札幌白石、札幌龍谷、小樽桜陽、北海から5名が出場した。この大会で遠軽高校は連続出場が途絶えたことになる。また、荒川翔哉選手(札幌白石1)が男子1年生としては北海道勢3人目の準決勝進出を果たし23位に食い込んだ。第15回大会(2024年)には札幌白石、大麻、札幌龍谷、北海、小樽桜陽から5名が出場した。男子は127名と過去最多の参加選手がエントリーしハイレベルな戦いとなった。荒川選手(札幌白石2)は武者選手(2015年)以来の決勝進出を果たし5位入賞、世界ユースに出ている選手たちと互角の戦いを演じた。さらに酒井雪羽選手(小樽桜陽2)が準決勝に進み25位に食い込んだ。



決勝で奮闘する荒川選手

第16回大会には遠軽、小樽桜陽、札幌白石から6名が出場した。前年度5位の荒川選手に大きな期待が寄せられたが、14位と健闘するも表彰台は逃した。

最後になるが今後もスポーツクライミングの競技者は増えるであろう。我々指導者は彼ら彼女らの活躍の場を確保すべく競技への理解を深めたいものである。